

生活環境学科における初年次教育の実践

下木戸 隆司・白井 靖敏

The First-Year Program at Department of Life Studies and Environmental Science

Takashi SHIMOKIDO and Yasutoshi SHIRAI

1. 目的

少子高齢化社会が進む一方で、我が国の大学進学率は年々高くなっており、いわゆる「ユニバーサル段階」に入ったと言われている。言い換えれば、大学教育を希望すれば、必ず、どこかの大学へ入学することができるのである。特色化が十分でない地方大学（短期大学を含む）は定員の確保に苦慮しているのが現実である。

一方、文部科学省は「学士力」、経済産業省は「社会人基礎力」というキーワードを掲げ、いずれにおいても、これからの大学共通の教育目標を示しているものであると言える。大学を卒業したあと、健全な職業生活、社会生活、家庭生活を営み、様々な場面で主体的に生きていける力を大学教育のなかで育てていくことが、大学の基本的な義務であり責任であることは言うまでもない。もちろん、これまで通りの大学教育を堅持していけば、こうした「力」を十分育てることができるはずである。しかし、ユニバーサル段階に入った今、大学には多様な学生（考え方、基礎学力、就学目的など）が入学してきており、従来型の教育では、必ずしも期待された成果をあげることができない。M.トロウの定義¹⁾を借りれば、エリート段階（該当年齢人口に占める大学在籍率が15%未満）であった時代の大学教育システムでは対応しきれないため、多様な学生一人ひとりに対応した大学教育への転換が必要なのである。

1991年の大学設置基準の大綱化により、大学の教育に関する制度は弾力化し、大学は、自主的に特色ある教育カリキュラムの改革を行うことができるようになった。さらには、学生の質変化に対応し、一貫した教育カリキュラムの体系化、および教養教育の目標も明示された。その後、各大学が教育カリキュラムの改革に取り組み、教養部改組や一般教育科目の減量化へと進み、連動して教養ゼミ（新入生ゼミ、基礎ゼミなど）が導入されていった。本学家政学部生活環境学科の「基礎ゼミ」もその流れに乗ったもので、大学進学率の上昇に伴い多様な学生に対応することもでき、加えて、高度情報化時代や国際化時代に応じたスキルを修得するためにも重要な位置づけとなっている。また、授業中の私語により、活発な討論ができない状況が増え、そのうえ学生の学びに対するモチベーションの低下により専攻不適合の問題等も起り始めているなか、こうした基礎ゼミの果たす役割を大きくしていることから、全国的な動向調査もおこなわれている。²⁾

ユニバーサル段階に入った今、本学においても、年を経るに従い多様な学生が入学してくるようになり、質的な変化も大きくなってきている。大学での「学び」についての本格的な教育

の必要性が増し、本学の初年次教育は、本年度（平成21年度）より、全学共通のテキスト『大学で学ぶということ』³⁾の配布、指導が始まった。家政学部生活環境学科では、平成21年度現在、初年次教育が正課の授業科目として設置されていないため、オリエンテーションや越原学舎研修（本学で実施されている2泊3日の宿泊研修）の期間中に時間を設けて実施するよりない状況にある。このような事情から、短期間に集中して初年次教育を実施せざるを得ない。

本稿では、平成21年度に家政学部生活環境学科に入学した学生に対する初年次指導、具体的には新入生オリエンテーションと越原学舎研修の結果考察を行う。さらには、こうした短期集中の初年次教育の効用と限界についても議論されることになるだろう。

2. 方法

平成21年度の生活環境学科における初年次教育はとくに大学での学び方に重点を置くかたちで計画し、平成21年度新入生72名に対して実施した。

（1）新入生オリエンテーションにおける初年次教育

実施時期は、4月7日（新入生オリエンテーション2日目）である。

実施内容は、高校と大学の授業の違い／大学の試験／大学でのクラス／大学で身につける力／授業の受け方などである。

（2）大学での学びに関する実態調査

大学での学び・学生生活に関する実態調査の目的から、6つの観点を設け質問紙調査を実施した。学生には、それぞれの項目に対する自分の回答を記述するように求めた。調査項目の性質上、6つの観点のうち最初の4つに関しては、初年次教育実施後のオリエンテーション最終日に調査用紙を配布し、回収した（第1回調査）。残り2つについてはオリエンテーションの約1ヶ月後、2週間経過した時点での状況を想起して記入するよう教示し、後日回収した（第2回調査）。

実施時期は、第1回目 4月8日、第2回目 5月中旬である。

調査項目は、初年次教育用テキスト『大学で学ぶということ』を事前に読んできたか／テキストの内容をどの程度理解したか／当日の説明を聞いて理解した点／当日の説明で理解できなかった点／2週間経過した時点での納得した点／2週間経過しても納得できない点、などである。

（3）越原学舎研修における初年次教育

実施時期は、6月9日（越原学舎研修2日目）である。

実施内容は、大学における学び方／文章要約のエクササイズ／アカデミック・プレゼンテーション大会などである。

（4）大学での学びに関する確認調査

4月に実施した初年次教育の効果を確認する目的で質問紙調査を実施した。

実施時期は、6月9日（越原学舎研修2日目）である。

調査項目は、大学での予習／大学での復習／大学での自主学習／ノートの取り方／試験答案・レポートの書き方／授業の空き時間（空きコマ）の過ごし方、などである。

3. 結果

(1) 新入生オリエンテーションにおける初年次教育

初年次教育の結果報告に先立って、どれだけの新入生が事前に初年次教育テキストを読み、どの程度内容を理解したと回答していたかを見ておくのが有用であろう。生活環境学科新入生の特徴を理解するために、本調査と同形式で行われた他学科・他専攻（短期大学部保育学科、文学部児童教育学科）との比較も交えて結果を示す。

① テキストを事前に読んできたか

本学では平成21年度から、新入生全員に対して『大学で学ぶということ（名古屋女子大学・名古屋女子大学短期大学部初年次教育テキスト）』を郵送で配布し、新入生オリエンテーションに先だて読んでおくように事前指導が行われることになった。本来であれば、新入生は全員テキストを予習してから、オリエンテーションに臨んだはずである。しかし実際のところは、生活環境学科の新入生で事前にテキストを「すべて読んだ」とこたえた学生は7%と、事前に十分に予習してきたといえる学生が1割にも達しておらず、ただテキストを読んでこいという事前指導を行うだけでは、あまり効果的ではないようである。しかし「ざっと目を通した」「少し読んだ」という学生をあわせて86%であり、大学で学ぶということの動機づけとして、事前配布の効果は大きいともいえる。一方、「まったく読まなかった」という学生は7%であった。

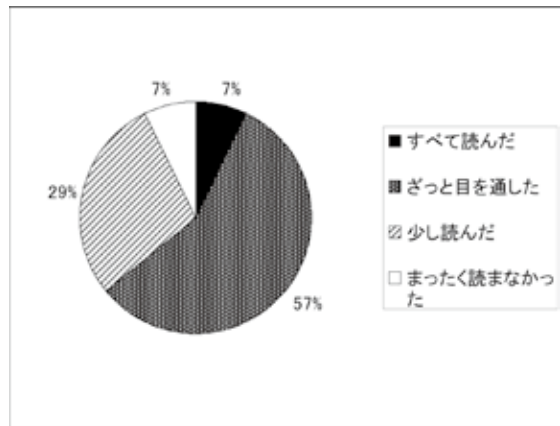


図1 テキストを事前に読んできた割合

予めテキストを読んでこないという特徴は他学科・他専攻においても同様であった。生活環境学科の新入生だけが積極的ではなかったというわけではないようである。

② テキストを理解したか

生活環境学科においては、テキストの内容を「理解できた」という学生は3%であり、「大体理解できた」が53%、「少し理解できた」が40%、「理解できなかった」が4%であった。読みやすく、理解しやすいテキストが使われたことを反映しているものと思われる。他学科・他専攻でもほぼ同様の傾向が見られた。

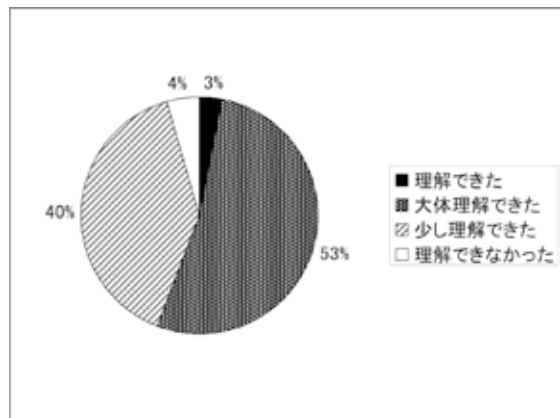


図2 テキストの内容を理解した割合

(2) 初年次教育の内容

初年次教育テキスト『大学で学ぶということ』の内容に基づき、①高校と大学の授業の違い、②大学の試験、③大学で

のクラス、④大学で身につける力、⑤授業の受け方、等について、適宜学生の意見や考えを尋ねながら、ワークショップ形式で実施した。

まず大学と高校との違いについては、授業時間（50分→90分）、学期制（3学期→2学期）、教科書の使い方（教師主導→学習者主体）、授業科目の選択（学校必修→個人選択）、単位認定（校長→担当教員）などの点を説明した。ほとんどの学生にとって、大学の授業形態は高校で受けてきた授業と大きく異なるため、なるべく円滑に大学へ移行が促されるよう、高校と大学ではどのような違いがあるのか、どうして高校の授業形態とは異なるのかといった点について、学生の反応を見ながら丁寧に説明した。

次に、試験については、大学での試験は単に知識を問うものではなく、理解したことや考えを尋ねる形式のものが多いこと、正解は一つではなく複数あること（そもそも未解決のものも多い）、文章を書かせる論述形式の問題が多いことなどを指摘した。大学での学びについていけるか不安に感じている者は、試験でよい成績が取れるかについてとくに心配していることが多いようである。大学の試験は高校までの試験とは性質が異なるために、その違いを理解し、普段から学習して準備しておくことの必要性を強調した。

大学でのクラスは、ホームルームという位置づけではないこと、連絡事項は自分で掲示板を見て把握しておくことと、大学でのクラス担任、ゼミのことについても紹介した。

大学で身につける力では、単に知識や技術だけを習得するだけでは時代の流れについていけず、すぐ陳腐化してしまう危険性を指摘し、知識・技術の生み出し方や応用の仕方を大学での学びを通して身につけることが大事だと訴えた。

最後に、授業の受け方では、積極的な授業参加（教員に質問したり、議論や発表の場に参加したり、積極的な授業参加が学びの質を深めること）、ノートの取り方（板書されない部分についても、口頭だけの説明や自分で理解したこと・考えたことをノートすること）、出席時のマナー、休講と補講、授業時間外学習（大学の授業は予習・復習・自主学習が不可欠）、試験の受け方（試験の種類、成績評価基準）の重要性を強調した。この部分は、具体的な大学での学び方（アカデミック・スキル）に関する内容だけに、本来であればじっくりと時間を割いて取り上げるべきところではあるが、実施時間の都合上、十分な説明ができず、最後は少し駆け足気味になった。学生のためと思って、取り入れた情報が少し多すぎたようである。しかし、どのトピックも大事な部分であり、軽々に内容を削減すべきではないのかもしれない。それならばどのようにしたらよいものか、なかなか悩ましい問題ではあるが、一度に沢山の情報を提示するという短期集中型の限界を示しているとも思われる。

（3）大学での学びに関する実態調査

オリエンテーション時の初年次教育は前述の通り行われた。続いて、このような初年次教育が新生にどのように受け止められたのかを、アンケート結果から見てみよう。

① 初年次教育での説明を理解したか

生活環境学科では「理解できた」と回答した学生が2%、「大体理解できた」が90%、「少し理解できた」が8%、「理解できなかった」が0%であった。他学科・他専攻もほぼ同様の結果を示している。

平成19年度に総合科学研究所が行った学生実態調査によると、新生が「不安に感じている」と回答した上位3項目は、大学での試験対策（61%）、ノートの取り方（50%）、予習・復習の程度（48%）であった。³⁾ 今回、初年次教育を受けて「授業の受け方」「予習・復習」について理解できたと回答している学生がいることを考慮すると、入学年度が異なるために一概に断

定することはできないが、初年次教育はこうした大学での学びの不安をやわらげる働きをしている点で評価できよう。

ただオリエンテーションで行った初年次教育の効果はあくまで一時的なもので、時間の経過とともに消失してしまっているかもしれない。この可能性を検討するために、2週間以上経過した時点で大学の学び方についてどのくらい理解したかを、質問紙調査によって検討した。その結果は以下のとおりである。

② 2週間授業を受けてみて納得したか
生活環境学科においては、「納得できた」という学生が19%、「大体納得できた」が74%、「少し納得できた」が7%、「納得できていない」が0%であった。このような傾向は他学科・他専攻でも同じように認められる。

先のオリエンテーション時の初年次教育直後とほとんど同じではあるものの、「理解できた」2%から「納得できた」19%へと割合が変化している点が評価できよう。以前のオリエンテーション時点では、ただ漠然と理解できたというだけの学生が多かったような印象を受けた。とりあえず説明を聞いたものの質問が思いつかないので、「大体理解できた」と回答していたように見受けられた。密度の濃い内容を一度に説明したことで、やや消化不良を起こしかけていたのかもしれない。そのような学生にとっては、実際に大学での授業を受け、話として聞いていた内容を実際に経験することで、理解が深まったものと考えられる。

(4) 越原学舎研修における初年次教育

本学では全学共通の必修科目として、創立者越原春子先生の事績を学び、自分達のルーツを考え直すという「建学のこころ」が1年次対象に開講されている。その際、岐阜県東白川村の越原学舎で2泊3日の研修を行うが、生活環境学科では6月8日から10日までの日程で実施された。アカデミック・スキルを題材にした初年次教育の取り組みは第2日の午前中に設定された。前半部では、大学での学び方の振り返りを行い、4月から取り上げている大学での学び方がどの程度定着したかの確認を行い、大学での学び方の復習と試験の受け方の補足をした。その後適切な情報を取捨選択する能力と文章表現力を高めるために、空欄のある要約文に必要な事項を記入するエクササイズ問題を実施した。休憩を挟んでから、後半部では大学での発表の仕方を学ぶ、「アカデミック・プレゼンテーション大会」をコンペティション形式で実施した。

大学では卒業研究やゼミ発表など、設定されたテーマについて情報を集め、それを分析・考察し、自分の意見として発表するというプレゼンテーションの機会が設けられている。論理的

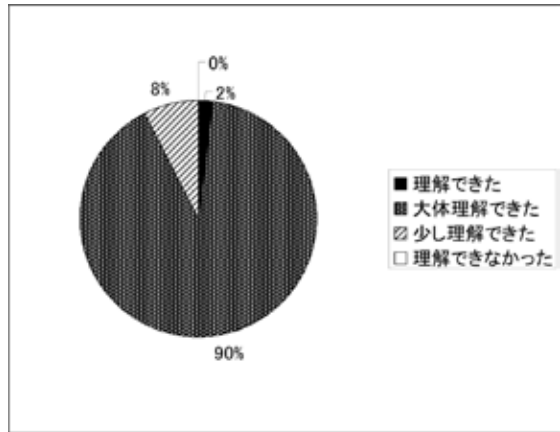


図3 初年次教育の説明を理解した割合

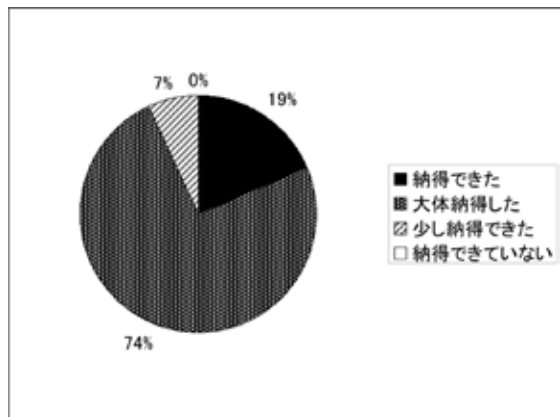


図4 2週間授業を受けて納得した割合

に、わかりやすく発表できる能力は、大学に必要なアカデミック・スキルのみならず、社会に出てからも顧客獲得、他者との商談、企画立案など、幅広い場面において重要視されている素養（社会人基礎力）の一つでもある。そこで、本年度では、越原学舎研修を利用し、プレゼンテーションの重要性を学生に自覚させ、効果的な発表にはどのような要件が求められるのかについて理解を促すために、相互コンペティションによるプレゼンテーション大会を行った。

発表はグループ単位で行い、1グループ4～7人からなる14グループを設定した。発表テーマは「偽装問題」とし、食品偽装や耐震偽装、原材料偽装など、衣・食・住の広い分野で起こった偽装事件の一つを選択させ、どのような事件だったのか（事件の概要）、どのような経緯で問題が発生したか（事件の展開）、消費者としてどんな点に気をつければよいか（対応策）について資料を集め、グループ内で話し合っまとめるように教示した。各グループは越原学舎研修までに発表原稿を作成し、発表のリハーサルをしておかねばならなかったため、事前学習として相当の時間が要求されるものであった。実際、発表時間が3分と短く、冗長な部分を省き、最小限の情報だけに絞り込む必要にせまられたために、時間調整には各グループともかなり苦労したようである。

当日は各グループの発表を聞き、それぞれを「話し方（声の明瞭さ、声の大きさ、話すスピード）」「態度（落ち着き、聴衆とのアイコンタクト、伝えたいという姿勢）」「時間遵守」「発表の工夫」「結論の明確さ」の5つの観点から、「素晴らしい」から「不足であった」までの6段階で評価を行った。その後、全員分の評点を集計し、最も点が高かった上位5グループを表彰した。評価はもっぱら学生による相互評価（他者評価）で行い、自己評価や教員評価による評点は加えていない。なお、相互評価で最高得点を取ったグループは、パワーポイントを使ってわかりやすい資料にまとめ上げており、教員から見ても高く評価できるものであった。

ほとんどの学生がこういうプレゼンテーションは未経験だったと語っていた割に、初めてにしては全体的によくできていた。しかし、細かいところではいくつか気になる点があったのも事実である。例えば、多くのグループが事件のニュース報道をかいつまんで話しているだけで、自分達の意見や考えが希薄だった点である。アカデミック・プレゼンテーションでは、単に情報やデータをまとめるだけでなく、そこから自分達の主張を展開していくことが求められている。その意味では、調べたことをそのまま発表するという「調べ学習」の感覚が抜けていないといえよう。もう一つ例を挙げれば、ほとんどの学生が原稿を読み上げるのに精一杯で、聴衆の方を向きながら発表する余裕がなかった点も気になった。慣れないうちは、大勢の前で話すことはかなりの緊張を強いられるものだが、聴衆に向けて発表することは発表の説得力を高める上でとても重要なことである。とはいえ、これらの問題点は未熟さに起因しており、今後このような機会を経験していくことで改善していくものと思われる。

ここで、このアカデミック・プレゼンテーション大会の感想を見ておこう。学生の記述を読む限りでは、「この課題がなければ、詳しいことや、こんなこともあったなど知らないこともわかったので、よい経験になりました」「班員が全員集まれる時間が限られているので、朝早く集まったり、帰りに遅くまで残って大変でした。また、資料を集めると様々な情報が集まりすぎて、そのまま発表をすると5分以上かかってしまうことがわかりました。そこから、重要な部分だけを残し、3分にまとめる作業では、皆が意見を出し合い、協力してやることのできたので、とてもやりがいがあったと思います」「将来自分に必ず役に立つことであり、やることであると思う。落ち着いてできるように少しずつ慣れていきたい」「大学生であること、社会人への第一歩として、出来不出来にかかわらず、挑戦できたことに意味があったと思います」

「グループでの意見交換などできて、とても楽しかった。もう少し長い時間プレゼンテーションをしたかった」「調べることによって、考えてまとめてそれを人に伝えるのは難しかった。3分という時間のなかでわかりやすく、でも手を抜かずにやって自分のなかで充実していたと思う」といった意見があり、多くの学生がプレゼンテーションの機会を肯定的に受け止めていたことが見て取れる。

また、「人に伝えるのは難しい事だと思った。自分達が理解していないと、相手にも伝わらないなと思った」「自分が話すのではなく、『書いてもらう』『伝える』ということは簡単そうに思えて、すごく難しく、時間と労力が必要なのだと思った。レポートを作成するだけであれば、紙面に文章を連ねればよいが、プレゼンテーションは話し方・アイコンタクト・見やすさなど、限られた時間で理解してもらうという難しさがあるのだと思った」という意見もあり、教員から指摘されなくても、わかりやすい発表に必要な要件を自分達自身で気づいている点には少々驚かされた。自分達で必要な情報を集め、整理し、発表するという能動的学習（アクティブ・ラーニング）によって、学びの質が深まったという実例であろう。何にせよ、限られた時間のなかで実施した割には、このアカデミック・プレゼンテーション大会は想定していた以上に効果があったものと思われる。

(5) 大学での学びの振り返り

① 予習、復習

予習を「毎日している」という学生は0%、「ときどきしかしていない」が48%、「していない」が52%であった。一方、復習については、「毎日している」という学生は1%、「ときどきしかしていない」が54%、「していない」が45%であった。

オリエンテーション時に予習・復習の重要性をとくに強調して説明したにもかかわらず、「毎日している」と回答した学生は1割にも満たなかった。4月の時点では、予習・復習が大事だと認識していた学生が多数いたものの、わずか2ヶ月の時点でその意識が減退してしまっている点が注目される。予習・復習しなくともよい楽な授業科目が多いのか、それとも授業についていくことを放棄しているのか、どちらが多いのかはわからないが、悪い意味で大学の授業に適応してしまっている傾向が窺える。実際、越原学舎研修中に学生と面談したり、個人的に話したりする機会があったが、「大学は高校より楽」という感想を述べている者が何人かいたのも事実である。学びの姿勢を身につけ、習慣化するためには、初年次教育で単に学びの重要性を訴え、学び方（ノウハウ）を説明するだけでは不十分なのかもしれない。実際に授業時間外

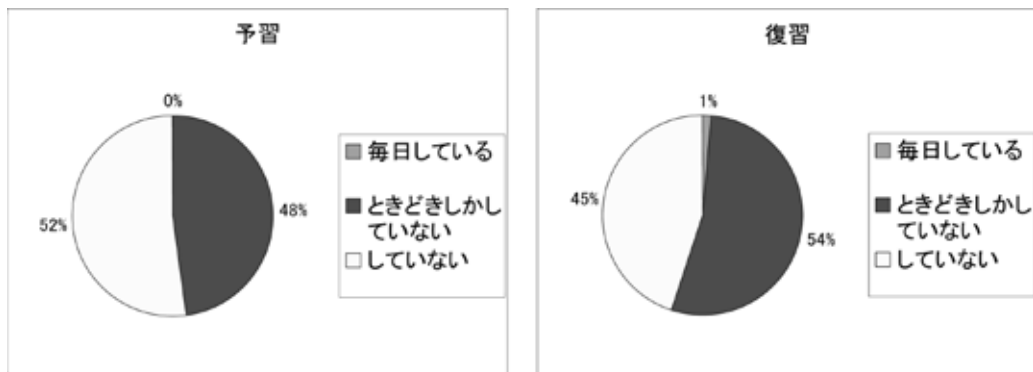


図5 予習および復習の状況

に予習・復習・自主学習が余儀なくされるような授業を増やし、とくに積極的にならなくても単位が認定される、いわゆる「楽勝科目」を減らしていくことが重要と考えられる。

なお、質問形式や調査実施時期が異なるものの、平成19年度の生活環境学科新入生に対して実施されたアンケート調査によると、予習を「毎日する」と回答した学生は2%、「ときどきする」が8%、「ほとんどしない」が15%、「まったくしない」が75%認められた。³⁾ 一方、復習については、「毎日する」と回答した学生は0%、「ときどきする」が7%、「ほとんどしない」が12%、「まったくしない」が72%であった。予習・復習を毎日きちんとする学生はさほど変わらないものの、時々ならするという学生は若干増えている。しかし、その割合はそれほど多くはない。これが今年度実施した初年次教育の効果によるものなのか、それとも調査実施時期の違い（19年度の調査は12月に実施）によるものなのか、単なる入学生の世代の違いによるものなのかは現時点では不明である。

② 自主学習、ノートの取り方

自主学習（将来の目標に向かって得たい知識・技術の学習）を「毎日している」という学生は0%、「ときどきしかしていない」が57%、「していない」が43%であった。一方、ノートの取り方については、「自分なりにわかりやすくまとめている（自分で調べたことなども含む）」と回答した学生が41%、「黒板を写すだけ（黒板などをあまり利用しない授業ではほとんどノートしない）」が56%、「ノートを取らない」が3%であった。

自主学習の程度も、先の予習・復習と同様、6月の時点で減退気味である。ノートの取り方についても、大学ではすべての授業が黒板やスライド資料を使うとは限らず、口頭での説明や自分で考えたことなども積極的にノートに記述していく必要があることを強調していたが、それを授業の受け方として取り入れて実践している学生は少ないという結果が示された。

前項同様、平成19年度生活環境学科新入生の調査結果では、自主学習を「毎日する」と回答した学生は2%、「ときどきする」が5%、「ほとんどしない」が13%、「まったくしない」が80%認められた。一方、ノートの取り方については、「黒板・パワーポイント画面等と先生の話とがまとめられる」と回答した学生は2%、「黒板・パワーポイント等を写すだけ」が16%、「ノートをとるが、後から読んでも分からない」が46%、「ノートのとり方がわからないのでとらない」が34%、「ノートをとるつもりはない」が2%であった。平成19年度の新入生と比べると、ノートを取らない（取り方がわからない）という学生は減少しているものの、自

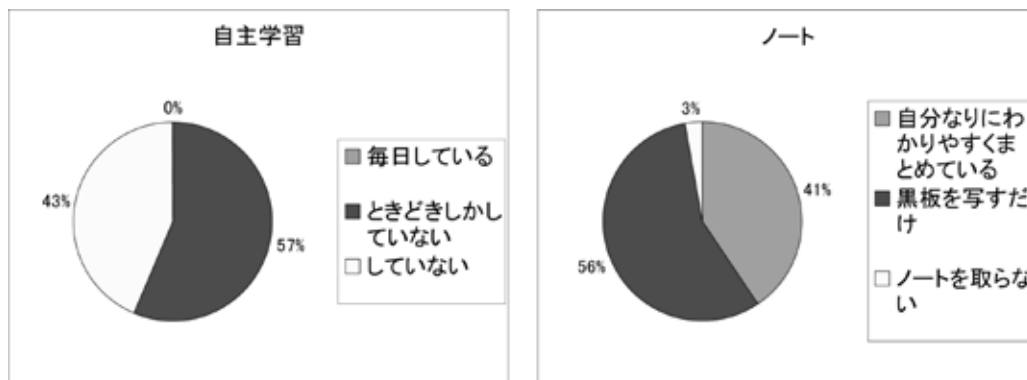


図6 自主学習およびノートの取り方の状況

分なりに工夫してわかりやすいノートを取れるという学生はほとんど変わっていないことが視える。

③ 試験答案・レポートの書き方、授業の空き時間の過ごし方

試験答案やレポートの書き方については、「だいたいわかってきた」が9%、「教えてほしい・練習したい」が85%、「練習したくない」が6%であった。期末試験が1ヶ月後に迫っていることもあって、4月当初よりも学生の関心が全体的に高まっているようである。とくに新生はまだ単位認定を経験していないだけに、自分がどの程度単位を取得できるかを不安に感じる者が多く、試験対策として何をすればよいか、レポートはどういう具合に記述すればよいかを気にしていると思われる。

授業の空き時間（空きコマ）の過ごし方については、「予習・復習」に充てているという学生が13%、「雑談やリラックス」する時間に充てているのが51%、「アルバイト」が0%、「とくに何も」していないというのが4%、必要ときには予習・復習をするが、それ以外のときには雑談に充てているのが10%、「その他」が22%であった。空き時間を雑談などの余暇活動に充てている学生が約半数を占めている。仲間との交流は大学生活への適応にとって極めて大事な意味を持っていることは確かだが、いつもそればかりだと、大学がレジャーランド化してしまう可能性が危惧される。その点では、予習・復習時間と雑談時間とが適度に混じっている状態が好ましいのかもしれない。なお、アルバイトをしているという回答が少ないのは、多くの学生が1日あたり3コマ程度の授業（週あたり14～16コマ程度）を履修しており、空き時間が90分程度とアルバイトをするには中途半端なためと考えられる。

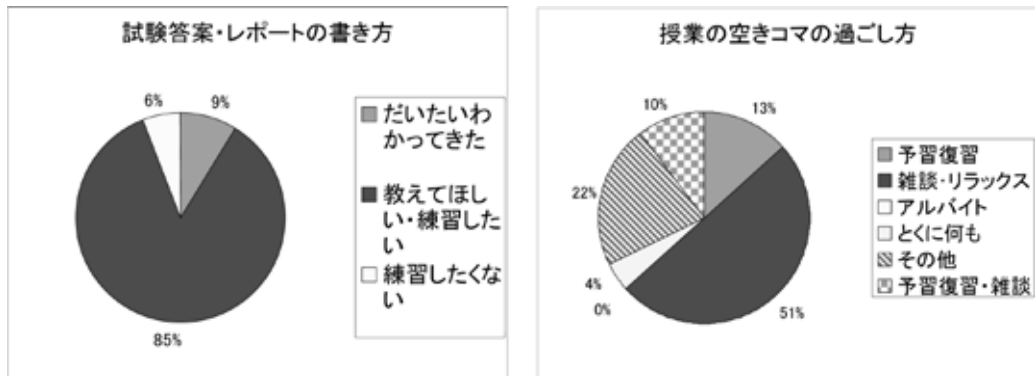


図7 試験答案・レポートの書き方および授業の空き時間の過ごし方の状況

4. 考察

新生生オリエンテーションにおける初年次教育では、第一に、初年次テキストを配布し、ただ読んでこいと教示するだけの事前指導では、しっかりと読んでこない学生が多数いることが示された。第二に、初年次教育の説明自体はわかりやすいものとして受け止められ、入学生の大学での学びへの不安をやわらげる効果があった。第三に、オリエンテーションで理解した内容は実際に大学の授業を受けることでより深まったものへ転化している可能性が示された。

越原学舎研修における初年次教育では、第一に、予習・復習・自主学習・ノートの取り方などに見られる学びへの姿勢・学習スタイルについては、4月当初に比べ、大きく減退している

傾向が覗えた。ただこのような傾向は何も本学生生活環境学科だけの特徴ではなく、時間とともに学習態度・意識が低減する傾向は他大学でも共通に見られることを付言しておく^{4) 5) 6)}。第二に、平成19年度新入生のアンケート調査結果と比較すると、本年度から本格的に実施した初年次教育の効果は、向上しているところがあるとはいえ、全体的には微妙なものである。第三に、これらの点から、いくら初年次教育で学びの重要性を強調し、わかりやすく学び方をレクチャーしたとしても、それが他の授業科目に活用される環境が整っていなければ効果が乏しいという可能性が示唆された。第四に、グループによる能動的学習であるアカデミック・プレゼンテーション大会は、当初意図していた以上に教育的効果が高かった。各グループとも、事前学習に相当の時間を割いて臨んでおり、実施後の感想を見ても肯定的に受け止めている者が多かった。

大学における初年次教育の在り方については、高等学校から大学への円滑な移行教育を含むなかで、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を「成功」させるためとされている。⁷⁾しかし、移行目標である「大学での『学び』」については具体的に示されておらず、多くの大学教員は、かつてのエリート段階にある時代の大学教育をイメージしていると考えられる。しかし今、ユニバーサル段階にある大学にとって、人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を「成功」させることは、必ずしも、古典的な大学教育への回帰を指すものではない。古き良き時代の大学のあり方を規範とするのではなく、時代や社会の要請に応じた大学教育の役割を模索する必要があるといえよう。とするならば、多様化する学生ひとりひとりに合った「学び」を大学が用意し、学生主体の「学び」を選択させながら、確かな「学士力」や「社会人基礎力」が身に付くような大学教育を構築しなければならないだろう。本学家政学部生活環境学科では、学科の教育目的である資格取得教育、キャリア形成への円滑な移行を実現させる教育体制の確立が重要と考えられる。

しかしながら、前者の方向で初年次教育を考えると、いまの学生には理解が難しいように思われる。今年度、生活環境学科で実施した初年次教育の結果からも窺える。短期集中型では、いくら、大学での「学び」として、授業の聴き方、ノートの取り方、試験やレポートなどについて、熱く語って聴かせても、初年次教育の効果は認められつつも、もともと未体験ゾーンにいる学生には、「だいたい理解できる」に留まっている。学科が目指す資格取得教育、専門教育、キャリア形成への円滑な移行へのスタートラインでもたついている。

大学での「学び方」に関する一般的な話に加え、具体的な体験型の授業（例えば、越原学舎研修でのアカデミック・プレゼンテーション、グループワークや少人数ゼミ形式の授業）の必要性を強く感じた。大学での主体的な学びを実現しつつ、これらの取り組みを有機的に連携させながら「学士力」や「社会人基礎力」を育てなければならないこと、言うは易しいが、今回の実施結果からも、学生の実態をみると、なま易しいことではない。

家政学部は、家政学の領域は衣食住のほか、生活に関わる複合領域をも含むため、領域が多岐に渡る。その中で生活環境学科は、住環境・衣環境・食環境に重点をおいているものの、家政経済学科と教育内容の重複もあり、入学生にとっては、はっきりとした特徴が見えにくいことや、少子化の進むなか、現実には定員の確保のため、低学力の生徒も入学させざるをえないのが現実である。初年次教育のさらなる前段階としてリメディアル教育、そして、学科独自の専門教育への導入教育も必要になってきている。

今後、生活環境学科では、具体的にどのような初年次教育が考えられるか。新聞がきちんと読めない、簡単な分数や割合の計算ができないなどのレベルの学生もいるので、基礎基本から

のリメディアル教育に関する選択科目を設置するとよいと考える。そして、大学での学び方や姿勢については、本年度と同様、新入生オリエンテーションや越原学舎研修で取り上げるとともに、体験的な授業として「基礎ゼミ」を1年次後期からに移行させることも考えられる。これまで、2年次で行っている「基礎ゼミ」での学習内容を見直し、文章の作り方に始まり、論文やレポート、レジユメの作成方法、「議論・ディベート」など、議論展開の方法や、「報告・プレゼンテーション」におけるレジユメやパワーポイントなどでの資料作成の方法や発表方法などの学習、図書館の利用法も含めて、学習や研究活動に必要な文献や資料の読み方、探し方の学習、パソコン操作やネットワークの利用法、教員とのコミュニケーションのとり方を学習する形が提案できる。

参考文献

- 1) M.トロウ、高等教育シリーズ96 高度情報社会の大学 - マスからユニバーサルへ - 喜多村和之編訳 玉川大学出版部 (2000)
- 2) 山本以和子、日本の初年次教育(導入教育)の現状 ベネッセ教育総研、<http://benesse.jp/berd/center/open/dai/index.shtml> (2001)
- 3) 遠山佳治、石倉瑞恵、伊藤太郎、宇野民幸、下木戸隆司、白井靖敏、竹尾利夫、谷口富士夫、原田妙子、幸順子、大学における効果的な授業法の研究4 - 初年次教育についての授業法の開発 - 名古屋女子大学、総合科学研究、第3号、p.1-43 (2009)
- 4) 河地和子 自信力が学生を変える - 大学生意識調査からの提言 - 平凡社新書 (2005)
- 5) 菊池重雄 一年次教育から移行教育へ 玉川大学特色GPシンポジウム「学士課程教育と一年次教育の役割」http://www.tamagawa.ac.jp/gp/tokusyoku/activity_report/06.html (2009)
- 6) 山田礼子、十河直幸、望月由起、山田剛史、杉谷裕美子 大学生の学習・生活実態調査報告書 Benesse教育研究開発センター (2009)
- 7) 濱名篤、川嶋太津夫(編著)『初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向』丸善株式会社 (2006)

Abstract

Many universities are beginning to provide universal access to higher education to meet the needs of each individual. The quality of the students changes year by year. In 2009, we started distributing a public text "Studying At Our University" to the freshmen from as the First-Year Program at our University. At the Department of Life Studies and Environmental Science, the freshmen use this text for orientation and externship at Oppara campus. We found that 1) the explanation with the text was effective in reducing anxiety about learning at our university, and 2) even when we emphasized, briefly, intensively and in an easy-to-understand manner, the importance of the studying, the effect seemed to be small unless the environment of each student promoted independent study. We will continue providing

the freshmen guidance in the orientation and externship at Oppara campus, and, in the future, examine the learning contents of “a basic seminar” for sophomores. A work-study (study based on experience) program for the freshmen should play a central role in The First-Year Program